

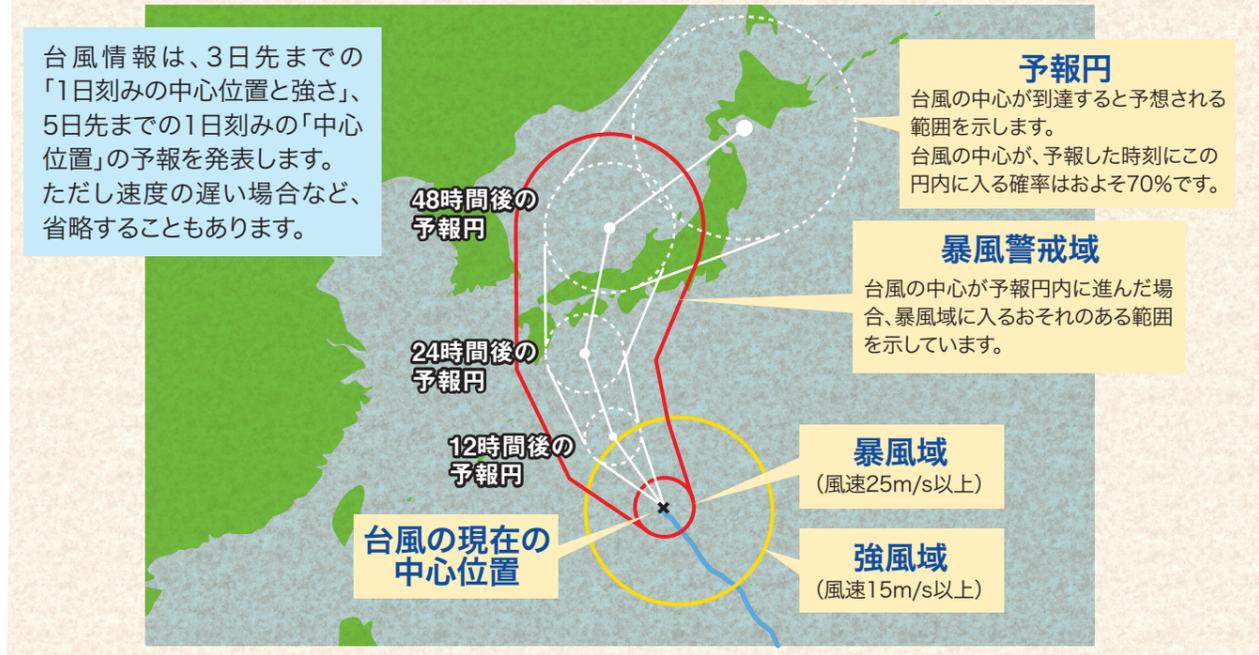
台風と集中豪雨等についてもっと知ろう！

藤枝市では、これまでに台風や集中豪雨によりさまざまな被害が起こっています。ここでは、台風情報の見方や、集中豪雨発生メカニズムなど、基本的な知識をまとめてみました。

台風とは？

熱帯の海上で発生する低気圧を「熱帯低気圧」と呼びますが、このうち中心付近の最大風速が17.2m/s（34ノット、風力8）以上になったものを「台風」と呼びます。

台風情報の見方



台風の大きさと強さ

気象庁は、台風のおおよその勢力を示す目安として、風速をもとに台風の「大きさ」と「強さ」を表現します。大きさは、強風域（風速15m/s以上）の半径で、強さは最大風速で区分しています。

また強風域の内側で、風速25m/s以上の風が吹いているか、地形の影響などが無い場合に吹く可能性のある範囲を「暴風域」と呼びます。

台風に関する情報では、これらを組み合わせて「大型で強い台風」のように呼びます。

台風の大きさ

階級	風速15m/s以上の強風域の半径
大型（大きい）	500km以上～800km未満
超大型（非常に大きい）	800km以上

台風の強さ

階級	最大風速
強い	33m/s以上～44m/s未満
非常に強い	44m/s以上～54m/s未満
猛烈な	54m/s以上

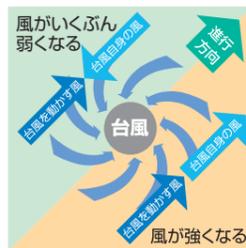
台風による風の強さと吹き方

台風は巨大な空気の渦巻きになっており、その風は上から見て反時計回りに吹いています。

そのため、進行方向に向かって右側の半円では、台風自身の風と台風を移動させる周りの風が同じ方向に吹くため、風が強くなります。

逆に左側の半円では、台風自身の風が逆になるので、右側に比べいくぶん弱くなります。

台風の眼に入ると風は急に弱くなりますが、眼の通過した後は風向きが反対の強い風が吹き返します。



風速10～15m/s	風に向かって歩きにくくなる、傘がさせない。取り付けの不完全な看板などが飛び始める。
風速15～20m/s	風に向かって歩けない。転倒する人もいる。ビニールハウスが壊れ始める。
風速20～25m/s	しっかり身体を確保しないと転倒する。飛来物で窓ガラスが割れる。
風速25m/s以上	立ってられない。野外での行動は危険。取り付けの不完全な外装材が飛び始める。

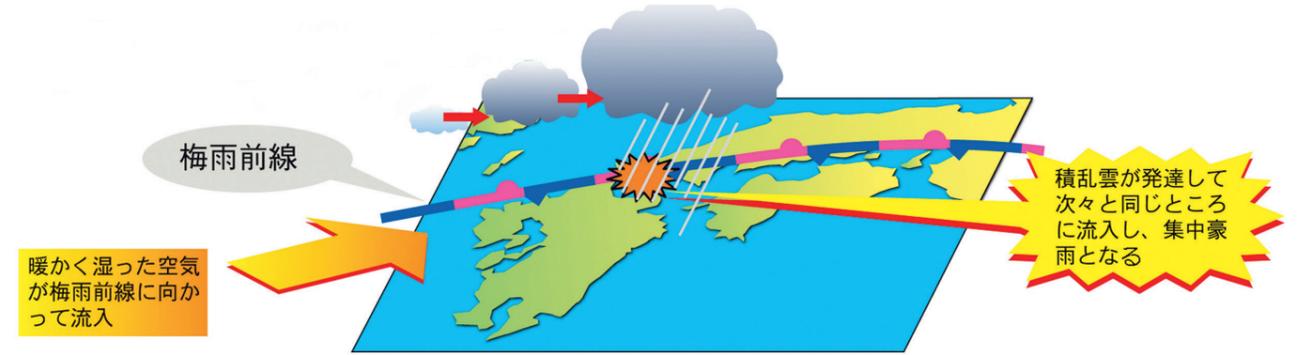
（風速は10分間の平均風速）

集中豪雨・局地的大雨とは？

「集中豪雨」とは、狭い範囲に数時間にわたって大量の雨を降らせるもので、総雨量が数百ミリに達することもあります。日本付近に前線が停滞している時（特に梅雨期の終わり頃）、台風が日本へ接近している時や上陸した時、大気不安定な状態が続き、次々と雷雲が発生する時などに発生します。

近年、国内では平成30年7月豪雨、平成29年7月九州北部豪雨、平成27年9月関東・東北豪雨等、毎年のように豪雨が頻発し、大きな被害をもたらしています。

藤枝市内では、台風や集中豪雨により、昭和49年7月（七夕豪雨）、昭和57年9月、平成15年7月、平成16年6月、令和元年10月に、大規模な浸水被害が発生しました。



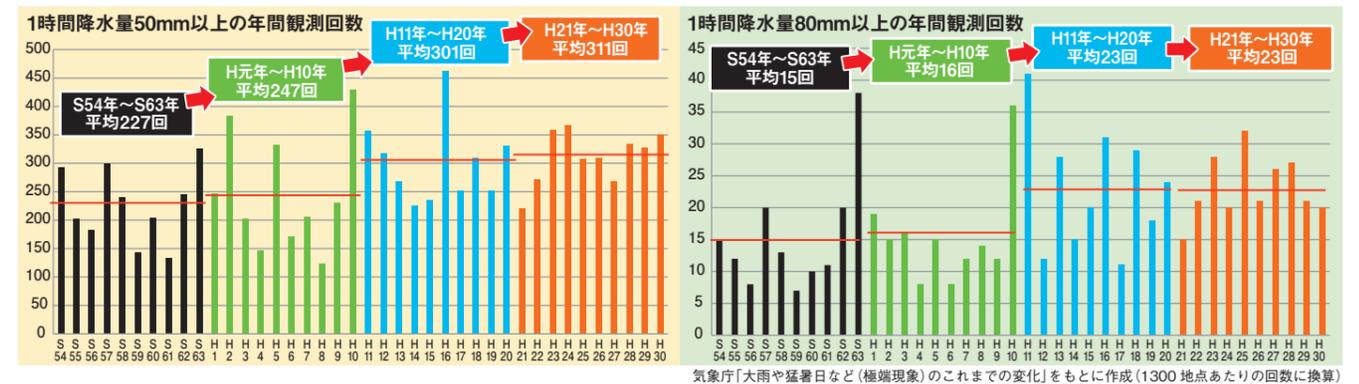
「局地的大雨」は、夏場などに大気の状態が不安定となって積乱雲が発達し、数十分の短時間に局地的に激しい雨を降らせる現象のことで、単位時間あたりの降雨量が非常に多く、時間百ミリ以上の雨量も記録されています。

極めて局地的に雨を降らせ、かつ雨雲の発生から降雨までの時間が短いため、「ゲリラ豪雨*」、ゲリラ雷雨*」と呼ばれることがあり、集中豪雨と比べより降雨範囲が狭いため、局地的大雨は予測が困難とされています。

全国的には、1時間に50mmを超える「非常に激しい雨」の頻度は、40年前からの10年間平均で比較すると4割程度増え、同様に、1時間に80mmを超える「猛烈な雨」も5割程度増えています。

地球温暖化に伴い、1時間に50mmを超える「非常に激しい雨」の頻度は、21世紀末には現在の約2倍に上がると予想され、その結果、今までに災害が発生しなかった地域でも、大雨で大きな災害が発生することが懸念されています。

※気象庁では予報用語として「ゲリラ豪雨」「ゲリラ雷雨」を用いていません。



もっと詳しく知るために！

気象庁のホームページから、台風や集中豪雨などの各種冊子がダウンロード可能です。

<http://www.jma.go.jp/>

